



Gerhard Richter  
ゲルハルト・リヒター展

6/7 TUE. — 10/2 SUN. 2022

生誕90年、画業60周年記念  
90th Anniversary of His Birth 60 years of Creation

東京国立近代美術館  
The National Museum of Modern Art, Tokyo

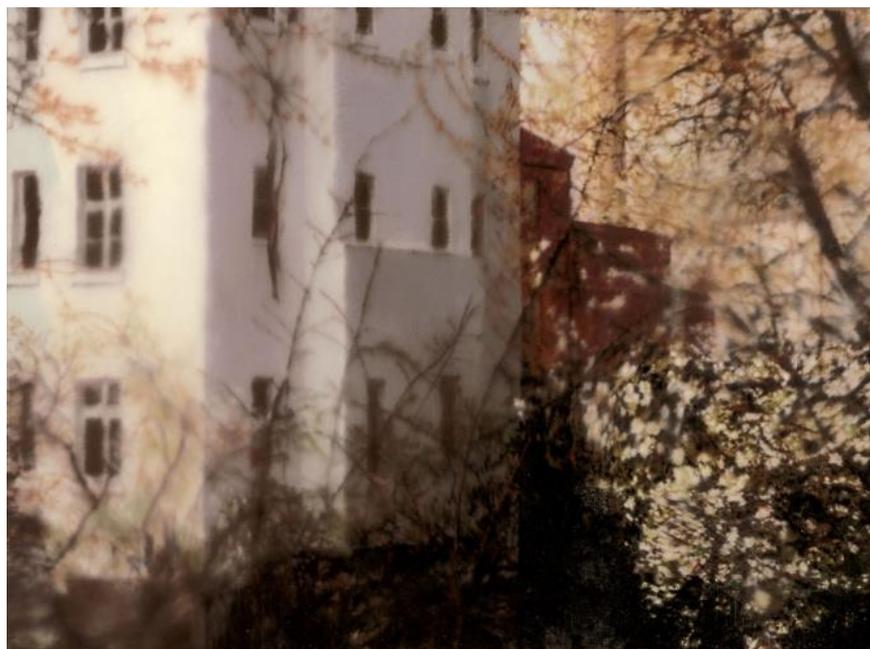
# Introduction

はじめに

1960年代に本格的に活動を開始して以来、60年にわたって制作を続けるドイツ出身の画家、ゲルハルト・リヒター（1932-）。世界のアートシーンの最前線を走り続け、その地位を揺るぎないものに行っているリヒターは、**現代アートを語る上で欠かせない最も重要な画家のひとり**です。

本展は、リヒターが大切に手元に置き手放さなかった60年代から近年に至るまでの作品約100点を中心に、その画業を読み解く展覧会です。フォト・ペインティング、カラーチャート、風景画、静物画、グレイ・ペインティング、アブストラクト・ペインティング、さらにガラスや鏡を使った作品など、絵画をめぐるリヒターの多岐に渡る表現を紹介します。

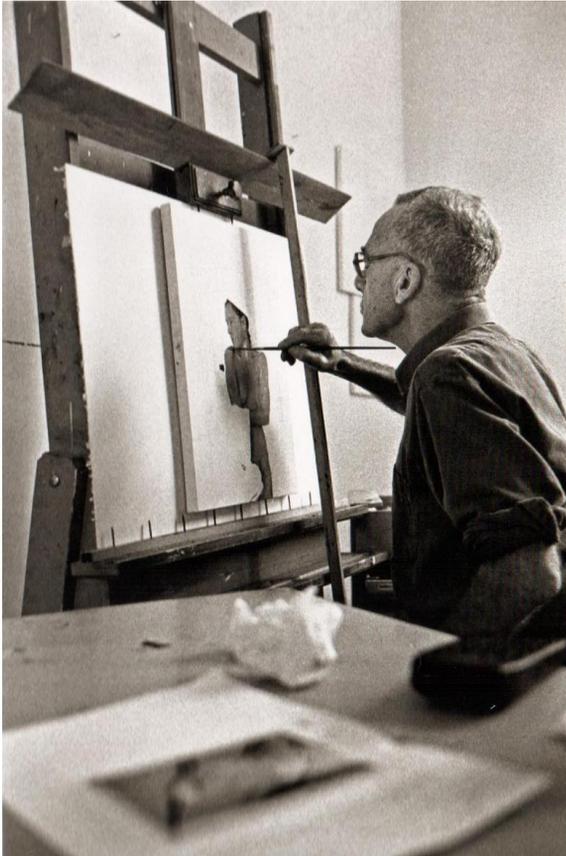
長らく日本での大個展が待ち望まれていましたが、このたびゲルハルト・リヒター財団、ワコウ・ワークス・オブ・アート協力のもと、作家が90歳を迎える2022年に東京国立近代美術館、豊田市美術館で大規模個展を開催いたします。



不法に占拠された家(695-3), 1989

# Gerhard Richter

ゲルハルト・リヒター



1932年2月9日、旧東ドイツ・ドレスデン生まれ。

1951年からドレスデン美術大学で学び、壁画について研究する。

1961年、ベルリンの壁ができる直前に旧西ドイツのデュッセルドルフに移住し、デュッセルドルフ芸術アカデミーに入学。コンラート・フィッシャーやジグマー・ポルケと友情を築き、「資本主義リアリズム」と呼ばれる運動の中で写真と絵画の間を往還するような独自の活動を行い、その名が知られるようになる。

1971年からデュッセルドルフ芸術アカデミーの教授となり、1994年まで教鞭を執る。

1997年にヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞と高松宮殿下記念世界文化賞を受賞。

これまでポンピドゥー・センター（パリ、1977年）、テート・ギャラリー（ロンドン、1991年）、ニューヨーク近代美術館（2002年）、テート・モダン（ロンドン、2011年）など世界の名だたる美術館で個展を開催。現代で最も重要な画家としてその地位を不動のものとする。

# Highlight

## 見どころ

### 1. ゲルハルト・リヒター、待望の大規模個展

2005-2006年にかけて金沢21世紀美術館、DIC川村記念美術館で個展が開催されて以来、実に16年ぶりとなる作家の大規模個展。  
また本展は待望の**東京での大規模個展初開催**として、2022年に90歳を迎える作家の、60年におよぶ画業をたどる展覧会です。

### 2. 誰も見たことがないリヒター作品

2012年、ロンドンでのオークションで存命作家の最高落札額（当時／2132万ポンド＝約27億円）を更新するなど、リヒターは世界のアートシーンで常に注目を集める作家の一人です。そのリヒターがマーケットに出さず大切に手元に置いてきた作品で構成されるゲルハルト・リヒター財団コレクションから、貴重な作品およそ100点を初めて一堂に公開します。

### 3. 次世代を担う学芸員との競演

世界中で個展や回顧展が開かれるリヒター。本展は其中でも、作家自身が積極的に構成に関わった貴重な展覧会です。  
また本展では、日本を代表する近現代美術の殿堂、東京国立近代美術館と豊田市美術館から気鋭の学芸員がキュレーションを手がけ、16年ぶりとなる日本での大規模個展で新たな視座を提案します。



アラジン(913-20), 2010

# Artworks

## 出展予定作品

※出展作品、項タイトルは実際の展示とは異なる場合があります

### ■ Birkenau / ビルケナウ

2014年に手がけた連作であり、財団コレクションの中でもとりわけ大作の作品群。強制収容所が建設された土地のタイトルが示す通り、アウシュヴィッツ強制収容所を主題とし、具象と抽象、歴史の表象／非表象といった問題を扱った作品で、財団コレクションの性格を特徴づける重要なシリーズ。本展でも中核的な位置づけとして展示予定です。



ビルケナウ(937/1-4), 2014



フリーダー・ブルダ美術館（バーデン・バーデン、ドイツ）での展示風景、2016年

《ビルケナウ》シリーズは、ゾンダーコマンドと呼ばれたユダヤ人労務部隊の囚人がビルケナウ強制収容所で撮影した写真を下敷きに制作された連作です。リヒターは長年、アトリエの壁に額に入ったこの写真を掛けており、制作の中で常に意識されてきたものであることがうかがえます。手元に置いて大切に保管されてきたプライベートなものであると同時に、扱う事象の射程はプライベートを大きく超えたある種の公共性を帯びているとも言えるでしょう。本展では、具象と抽象、表象と非表象、見えることと見えないこと、描くことと隠すこと...など、リヒター作品を特徴づけるこうした性格を、財団コレクション、とりわけ《ビルケナウ》を核としながら読み解いていきます。



1944年8月 アウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所



*Birkenau (937-2)*, 2014, Oil on Canvas, 260x200cm



July 15



July 20



August 1



August 3



August 4



August 13



August 14



August 16

## ■ Recent Abstract Paintings / 近年の抽象絵画



アブストラクト・ペインティング(946-1), 2016



アブストラクト・ペインティング(946-3), 2016

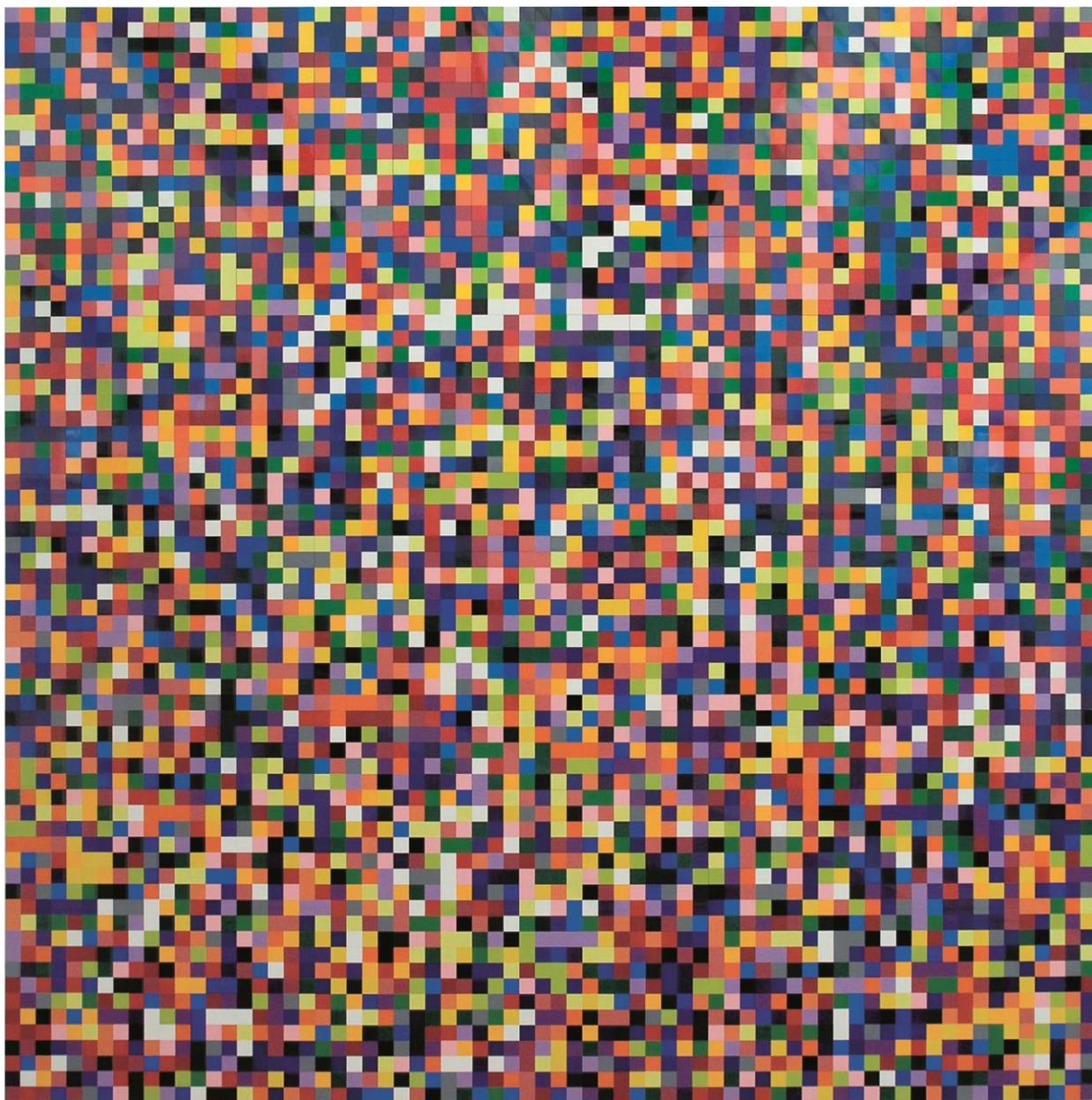
1970年代後半から取り組み始めた抽象絵画では、自作のスキージ（大きなヘラのようなもの）を用いて、絵具を塗りながら同時に削ぎ落とすような独自の制作方法を用いています。ここでは、**なにかを表象すること、そしてそれを覆い隠し、削り取ってしまうこと**といったアンビヴァレントな行為が繰り返されています。

そうしたアプローチは、リヒターが初期から描いてきた写真的な具象作品に見られる、個人的な記憶や集団的な歴史の表象の（不）可能性という観点で通じます。何かを表すことと何かを抹消することが両立するリヒターの絵画は、**絵画を描くことが私たちの世界の把握や歴史の認識においていかなる真正性を保ちうるかを問うもの**です。

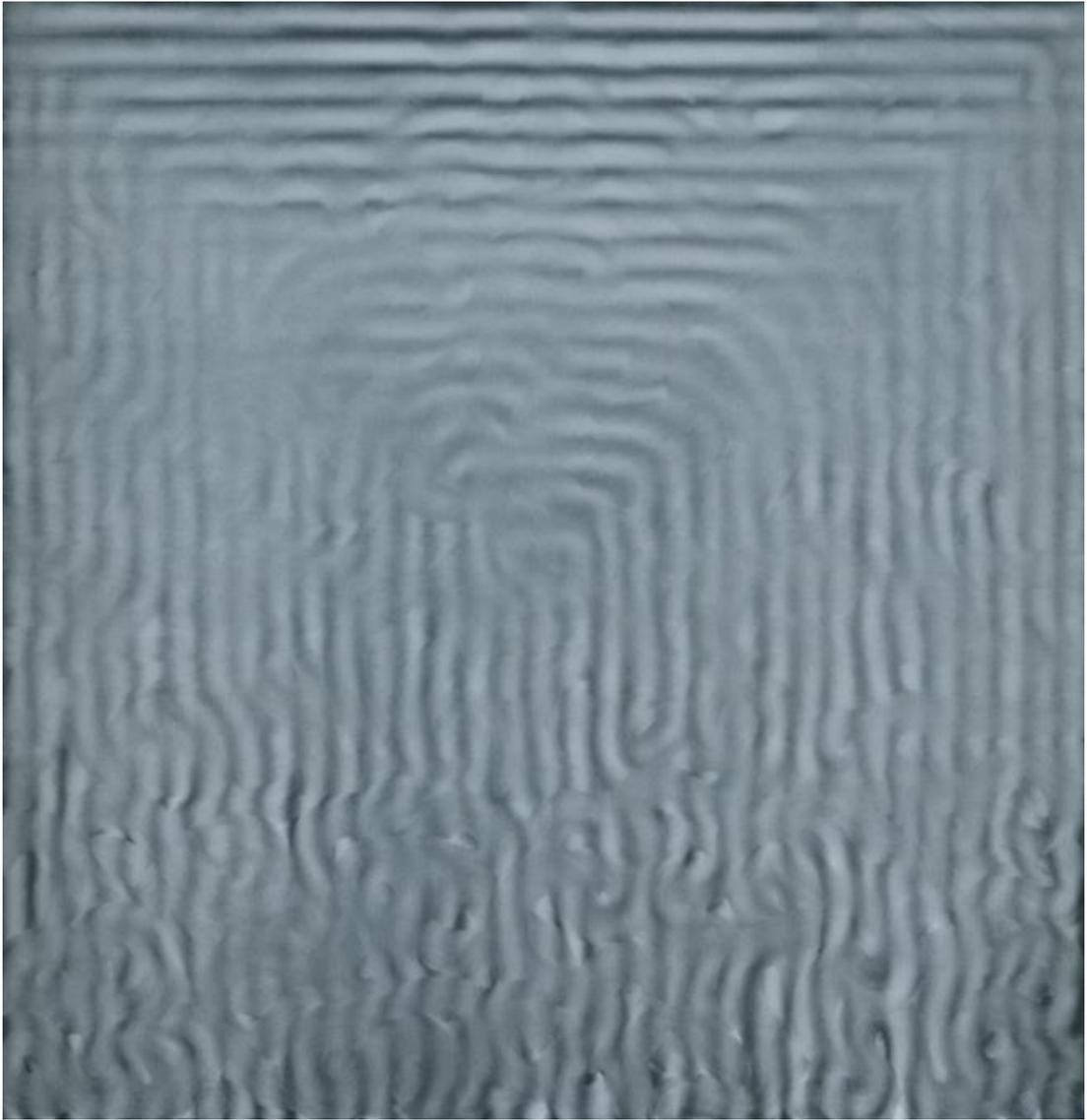
## ■Color/Grey／色彩とグレイ

工業製品の色見本として売られているカラーチャートを絵の具に置き換えた幾何学的な絵画シリーズ。どの色をどの位置に塗るかは偶然に任せ、主観的決定を排除しています。

カラーチャートが色の細分化であれば、グレイ・ペインティングはその対極の「色の集積」といえるでしょう。リヒターにとってグレイは「無」であり、自己を超越した「無」の概念は現代音楽家ジョン・ケージの言葉「私にはなにもいうことはない、だからそのことを言う」の影響によるといわれています。



4.900の色(901), 2007



グレイの縞模様(192-1), 1968



1945年2月14日(881-1), 2002



黒・赤・金(856-7), 1999

■Public/Private, Named/Anonymous／公と私、あるいは実名性と匿名性



モーターボート (第1ヴァージョン) (79a), 1965



8人の女性見習看護師(130a), 1971

## ■ Overpainted Photographs シリーズ

1980年代からリヒターが取り組み始めたスナップ写真に油彩絵具を塗布したシリーズ。光によって生み出された写真というイメージと、それを覆い隠すような絵具という物質との関係は、イメージの表象／非表象といった問題系を表すだけでなく、写真であり絵画であり、そして写真でもなく絵画でもない、といった二重否定・イメージの解体と再構築が示唆されている。



1998年2月14日(14.02.1998)、1998年



2005年6月20日(20.06.2005)、2005年

# Why Richter?

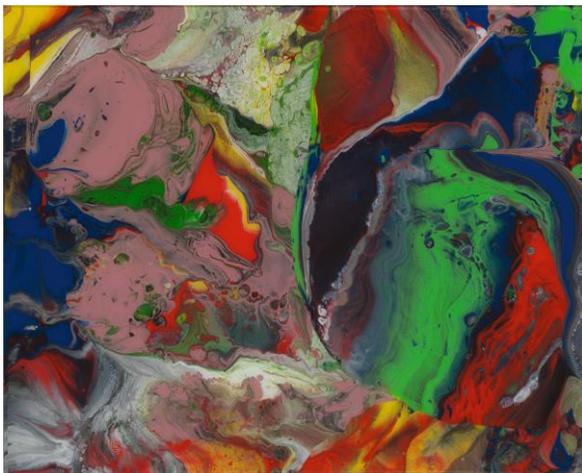
いまりヒターを見るべき理由

## 絵画史の追体験

“絵の具”という元来ただの物質である工業製品が、画家によってカンヴァスに描かれることで、特定のイメージが立ち上がってくる。その「絵を描く」という行為そのものへの探求と、そしてそれを知覚し認識する私たちの「見る」という行為への思索——具象と抽象を常に往還し、多種多様なモチーフと支持体で制作を続けてきたリヒターの画業は、まさに**20世紀の絵画史そのもの**ともいえます。

## 上質な本格的展覧会

「絵画」に真摯に向き合い続けた木訥な画家は、いまや現代において最も重要な作家です。そんな巨匠の作品を読み解くのは、近現代美術を専門とする気鋭のキュレーターたち。日本での本格的展覧会の開催に向け、日本古来のキーワードを鍵にリヒター作品の再解釈を試みます。  
時代の流行に左右されない、**真に知的欲求を満たす上質な鑑賞体験**をご提供します。



アラジン (913-20), 2010



アラジン (913-21), 2010

# Outline

## 開催概要

### ゲルハルト・リヒター展（仮題）

#### 会期・会場

2022.06.07～2022.10.02 東京国立近代美術館

2022.10.15～2023.01.29 豊田市美術館

#### 主催

東京国立近代美術館（東京会場）、豊田市美術館（愛知会場）、朝日新聞社

#### 特別協力

ゲルハルト・リヒター財団、ワコウ・ワークス・オブ・アート

#### 後援

ドイツ大使館（予定）



東京国立近代美術館



豊田市美術館